



日本産歩行虫ノート II: 北海道で再発見されたセスジカタキバゴミムシ*

笠原須磨生・森 正 人

1873年に、H. W. BATES がロンドン昆虫学会会報に公表した「日本の陸生肉食甲虫類」は、いうまでもなく日本の歩行虫研究史の黎明期に記念すべき著作のひとつであるが、これに記載されて以後まったく記録がなく、われわれにとって謎の存在となっている種もある。セスジカタキバゴミムシ *Badister vittatus* もそのひとつであった。

本種は“Kawachi” (大阪府河内) で得られた1頭の雄に基づいて記載されたが、この類としては大型で色彩的特徴が顕著であるにもかかわらず、1世紀余を経過してなお追加の知見が得られぬままになっていた。筆者らの知るかぎり、わが国における本種の記述は、最近の中根猛彦博士による日本産カタキバゴミムシ族 *Badistrini* の解説(1985)中で、詳細不明のまま紹介されたものだけである。かつて、大英博物館(自然史)で基準標本を実見されたことのある上野俊一博士は、その印象をセスジヒラタゴミムシ *Agonum daimio* (BATES) に似た感じであったと語っておられたが、この種とカタキバゴミムシ類の生息環境が同

様に池沼の岸や河川敷などの湿性の草地であることから、このような場所が少なくなりつつある近畿地方では、すでに絶滅したのではないかとさえ思われていたのである。

したがって今回、本種が北海道で採集されたのはまったく予想外の再発見であったが、同時に興味深い事実も判明した。すなわち、筆者の一人である森は、1984年6月、北海道渡島支庁の八雲町で、オサムシ類採集のためのトラップ設置中に1頭の見馴れぬカタキバゴミムシを採集したが、その同定を依頼された笠原は、これこそ長いあいだ探し求められていたセスジカタキバゴミムシにほかならず、上翅の黒紋がより幅広いことを除けば原記載によく一致することを確認し、上野博士からも本種に違いないとのご教示を頂いた。因に、BATES の記載はきわめて簡潔だが、他に近似種のない顕著な種でもあり、充分にその特徴をつくしていると思う。

さらに、森は翌1985年8~9月に、今度は日高支庁新冠の山林で3頭の本種を採集したが、この時もオサムシ採集のトラ

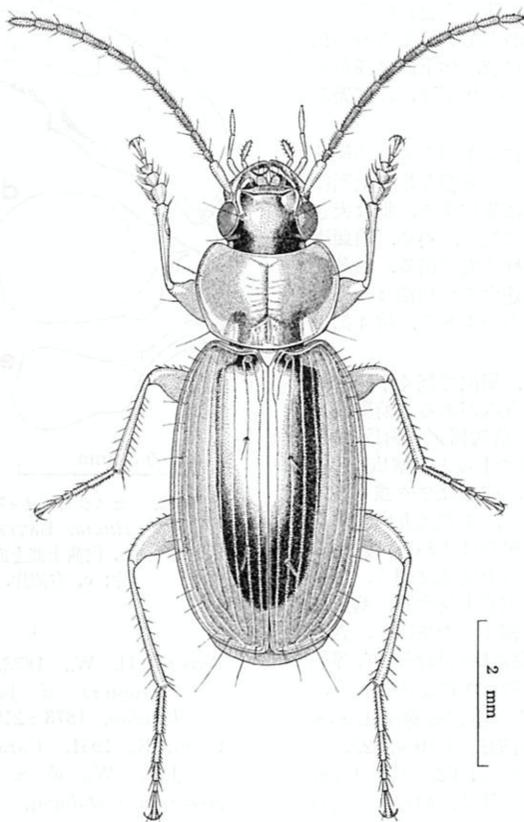


図1. セスジカタキバゴミムシ *Badister (Baudia) vittatus* BATES, ♂; 北海道日高支庁, 新冠産。

* S. KASAHARA & M. MORI, Notes on Japanese ground beetles, II: *Badister vittatus* BATES rediscovered in Hokkaido, Northeast Japan.

ップ設置中に発見したもので、どうやら本種は既知種の多くとは異なり林地性のものである。このこともこれまでの探索の盲点であったかもしれない。

また、CSIKI (1931) はユンクの目録中で本種を *Badister* 亜属として扱っているが、中根(同前)が疑問視したとおり大顎の形態的特徴から *Baudia* 亜属に含めるべきものであることが判明した。

ここに、この珍しいゴミムシを図示再記載してさらに新産地の発見と生態の解明を期待し、あわせて日頃から多大のご教示を賜わり、本種の再発見をもっと喜んでくださった国立科学博物館の上野俊一博士に心から感謝の意を表したい。

Badister (Baudia) vittatus BATES

セスジカタクバゴミムシ

Badister vittatus BATES, 1873, Trans. ent. Soc. London, 1873: 258 (Kawachi). —CSIKI, 1931, Coleopt. Cat., pars 115: 907. —中根, 1985, 昆虫と自然, 20(11): 22.

体長 6.7~7.2 mm, 体幅 2.6~2.9 mm. 頭部と上翅の第1~5間室は両端部を除き黒色; 頭盾, 上唇, 大顎と触角柄節の先端部から第9節まで暗赤褐色; 先端3節は淡色; 上翅, 口肢, 体下面は淡黄褐色; 口肢の末端節は濃色; 上翅と体下面には虹光沢がある。

頭部は近縁の他種と形態的に大差がなく、等径状の微細印刻が強く、光沢が鈍い。大顎左片の上面は強くえぐられ、基部はコブ状に隆起する。眼は大きい、やや平たく、こめかみは短く、斜め。前頭溝は痕跡的。下唇基節の中央は軽く突き出る。触角は糸状で長く、上翅の中央部に達する; 柄節は太く、最長; 次節の約3倍, 第3節の約1.8倍, 第4節よりわずかに長い。

前胸背板は光沢がやや弱く、横位で軽く中高, 同属の邦産種のうちでもっとも丸みがある。前胸幅/頭幅 1.36~1.50, 平均 1.42; 前胸幅/前胸長 1.46~1.56, 平均 1.50. 前方1/3でもっとも幅広く、側縁は弧状、後方へ強く狭まる。前縁はやや強く湾入し、縁取られる; 前角は突出し、先端は丸い。後縁は両側がいちじるしく斜め; 後角はきわめて鈍く、丸いためにやや不明瞭。側縁の上反部は細く、後半でややひろがり、後角部では広く上反する。基部凹陷はやや浅く丸い。正中条は細く、やや深い。表面は基部に縦しわ、正中条の両側に横しわがあり、等径状の微細印刻が後半部でやや明らかに認められる。

上翅は光沢が強く、長形。上翅幅/前胸幅 1.33~1.38, 平均 1.36; 上翅長/前胸長 3.19~3.23, 平均 3.21; 上翅長/上翅幅 1.54~1.62, 平均 1.58. 基縁は軽く湾曲し、斜め前方へ伸び、側縁との会合部は鈍く、丸い。肩部は前方へ突き出し、丸い。側縁は均等に軽く弧状、先端は広く丸まり、ときにやや切断状。条溝は細くなめらかで、基縁に達しない。間室は平たく、第3間室に2孔点があり、前方約1/3と後方約1/3で第2条に接する。会合部ぞいの

黒紋は第1~3間室で基縁に達する個体もあるが、第4~5間室では基縁にとどかず、後端は第1~3間室で後方に延びるが、翅端には達しない。

附節は全節にわたって上面中央に溝があり、基部3節は両側にも溝がある。雄の前跗節基部3節は幅広く、クサビラ状の粘着毛がある。

陰茎はやや単直で基部が太い。上面のキチン硬化部は細長い2片状で先端に達する。先端片はきわめて狭く、中央がわずかに突出し、下面に短い逆棘がある。下面は前方に先端に達するやや深い舟状窩があり、その中央部に短い隆起と基方に向く棘がある。左右の側片は扁平で、先端はやや切断状。

検視標本: 1♀, 北海道渡島支庁, 八雲町, 24. vi. 1984, 森正人採集; 1♂1♀, 北海道日高支庁, 新冠(標高100m), 18. viii. 1985; 1♀, 同, 19. viii. 1985, 森正人採集。

分布: 日本(北海道, 本州)。

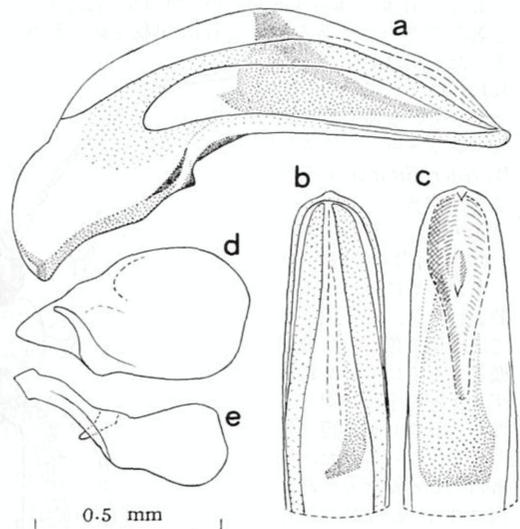


図2. セスジカタクバゴミムシ *Badister (Baudia) vittatus* BATES, ♂ 交尾器: a, 陰茎左側面; b, 同前半部上面; c, 同前半部下面; d, 左側片; e, 右側片。

参考文献

- BATES, H. W., 1873. On the geodephagous Coleoptera of Japan. *Trans. ent. Soc. London*, 1873: 219-322.
- CSIKI, E., 1931. Carabidae: Harpalinae V. In JUNK, W., & S. SCHENKLING (eds.), *Coleopterorum Catalogus*, pars 115 (pp. 739-1022). W. JUNK, Berlin.
- 中根猛彦, 1985. 日本の甲虫(70). 昆虫と自然, 20(11): 22-26.
- (笠原: 千葉県船橋市; 森: 北海道札幌市)

○南西諸島未記録のゴミムシダマシ若干の分布記録
 筆者は「原色日本甲虫図鑑(Ⅲ)」(保育社)に分布記録のない南西諸島のゴミムシダマシ類を次の通り採集, 所有しているので報告しておきたい。

報告に先立ち, 一部の種の同定をお願いした平野幸彦, 益本仁雄の両氏, ならびに貴重な標本を恵与された酒井 香氏に厚くお礼申し上げる。

1. マルヒラスナゴミムシダマシ *Diphyrrhynchus oharensis* NAKANE

12 頭, 宮古島友利, 25. vii. 1985, 酒井香採集。

2. ヤエヤマオオスナゴミムシダマシ *Gonocephalum kondoi* MASUMOTO

12 頭, 西表島大原, 24. ii. 1984.

本種は, MASUMOTO (1983) により石垣島産の標本で記載され, その後 MASUMOTO (1985) のリストでは分布地として西表島が追加されたが, その基になった資料は筆者採集による上記のデータであり, 西表島における具体的な本種の記録が報告されるのは今回が初めてと思われる。

3. コマルチビゴミムシダマシ *Nesocaedius minimus* (M. T. CHŪJŌ)

上記3種は, いずれも海浜の砂の中より採集された。

4. ヤエヤマキノコゴミムシダマシ *Platydemacelatum* NAKANE

2 頭, 石垣島バンナ岳, 20. ii. 1982; 20 頭, 同所, 9. ix. 1982.

5. ツノチビゴミムシダマシ *Pentaphyllus philippinensis* KASZAB

13 頭, 石垣島バンナ岳, 9. ix. 1982.

6. ヨツノチビゴミムシダマシ *Pentaphyllus quadricornis* GEBIEN

12 頭, 石垣島バスナ岳, 27. ii. 1984.

7. フタヅノチビゴミムシダマシ *Pentaphyllus dilatipes* SHIBATA

12 頭, 石垣島バンナ岳, 27. ii. 1984.

上記4種は共に腐朽の進んだキノコの中から採集した。

8. アマミクロホシテントウゴミムシダマシ *Dirispia japonica* KASZAB

1 頭, 宮古島友利, 25. vii. 1985, 酒井香採集。
 (東京都世田谷区, 沢田和宏)

○ワタミヒゲナガゾウムシの一生態例

ワタミヒゲナガゾウムシ *Araecerus fasciculatus* DE GEER は, 世界各地に分布し, 乾燥ニンニク・コーヒー・綿実・種々の小枝などにつく種であるが, 今回, 園芸用の固形肥料より本種が得られたので報告する。

13 頭, 東京都足立区北千住, 30. viii~6. ix. 1985, 海老原裕之採集。

本例は鉢植のランに使用した固形肥料に飛来したもので, 附近には林もなく, 固形肥料より発生した形跡もなく, どこから飛来したのか不明であるが, 都会の中での興味ある例である。後日, 本種が飛来

した固形肥料を点検したところ, 幼虫を多数確認することができたので, 摂食・産卵をおこなっていたことがわかった。固形肥料は, ニッサン肥料のフラワー & グリーン・メイトで, 配合成分は菜種油かす60%, 蒸製骨粉25%, 魚粉15% である。

末筆ながら, 同定および種々ご教示を賜わり発表を勧めてくださった妹尾俊男氏に厚くお礼申し上げます。(東京都豊島区, 江本健一; 東京都足立区, 海老原裕之)

○栃木県黒磯市でヒラヤマコブハナカミキリを採集

ヒラヤマコブハナカミキリ *Enoploderes bicolor* OHBAYASHI の栃木県下の記録は, すでに糸 (1980) が塩原町から報じているが, 本種は東京都高尾山や静岡県の一部で多数得られている他は, 青森から福岡まで28都道府県で記録されているもののいずれも局所的で, 確認個体数も少いことから県下のものを追加記録しておく。

1 頭, 黒磯市百町深山(小蛇尾川源流域), 21. v. 1986, 西垣士郎採集

本個体は, 夕刻樹林内をゆっくり飛翔し林床に止まったところを素手で採集したものである(天候は曇り)。採集地点は標高約730mの斜面上部で, 植生はハウチワカエデ, ハクウンボク, トウゴクミツバツツジ等からなるイヌブナースズタケ林であった。

末筆ながら諸々ご教示下さった斉藤秀生氏に深謝する。なお, 標本は同氏が保管している。

参考文献

糸久仁雄 (1980) 月刊むし, (115): 34
 森直直 (1980) インセクト, 31 (2): 77
 栃木県立博物館 (1984) 栃木県のカミキリムシ: 23 (東京都小平市, 西垣士郎; 東京都目黒区, 松本俊信)

○ナラノチャイロコガネの冬期採集例

1983年12月28日, 筆者の住む利根川流域においてオサ掘りの最中, 土中よりナラノチャイロコガネ *Proagopertha pubicollis* (WATERHOUSE) 1 頭を採集した。本種の冬期における採集例は無いようなので, ここに記録しておく。なお, 本種の同定をお願いした小林裕和氏にお礼申し上げます。

(群馬県明和村, 長島洋二)

○ヤマトヒメメダカカコウムシ茨城県に産す

ヤマトヒメメダカカコウムシ *Neohydrus hozumii* NAKANE は, 愛知県庄内川河口付近のヨシより穂積俊文博士により多数採集された標本を基に比較的最近発表された種類である。その後神奈川県から記録されたが, 筆者は筑波大学の桃定洋博士が採集された下記の標本を検したので報告する。標本恵をご与下さり, 発表を許された大桃博士に深謝する。

3 頭, 茨城県土浦市突塚, 23. vi. 1984.

すべてヨシのスイーピングより得たとのこと。筆者の台湾, タイでの本属が含まれる数種の採集経験では, シイ類の花上にも集まり, すべてコバネ型のものであった。

(横浜市金沢区, 秋山黄洋)

○福島県のコメツキダマシ科 (1)

従来, 福島県よりのコメツキダマシ科の報告はき

わめて少なかった。今回、黒沢良彦博士が集められた国立科学博物館所蔵の標本と、筑波大学の大桃定洋博士よりご恵与いただいた標本で第一報をまとめることにした。

本報告に当り、標本の発表を快く許された黒沢、大桃両博士、ならびに露木繁雄氏、文献で大変お世話になった愛媛大学の久松定成氏に深謝する。

1. ナガコメツキダマシ *Isorhipis banghaasi* (REITTER, 1899)

1♂, いわき市江田, 10. vii. 1972; 2♀♀, 同, 17. vii. 1983, すべて大桃定洋採集。

2. ヒメフトコメツキダマシ *Bioxylyx japonensis* (FLEUTIAUX, 1900)

1頭, 湯ノ花, 7. vii. 1948, 黒沢良彦採集。

3. キンケヒメフトコメツキダマシ *B. pilosellus* HISAMATSU, 1959

1頭, いわき市江田, 24. vii. 1982, 大桃採集。

4. ツヤヒメコメツキダマシ *Xylobius rufomarginatus* FLEUTIAUX, 1923

1頭, 岩瀬郡天栄村二岐沢, 7. vii. 1949, 永山幸一採集。

5. コクロコメツキダマシ *Euryptychus lewisi* FLEUTIAUX, 1923

4頭, 河沼郡柳津町七折坂, 13. iv. 1948, 黒沢採集。

6. オニコメツキダマシ *Hylochaeres harmandi* FLEUTIAUX, 1923

1頭, いわき市四時川溪谷, 29. v. 1982, 大桃採集。

7. ヒゲボソヒメコメツキダマシ *Hypocoelus harmandi* FLEUTIAUX, 1900

1頭, 南会津田代山, 9. vii. 1948, 中根猛彦採集。

8. *H. sp.*

1頭, 南会津下郷町, 18. vii. 1948, 永山採集。久松氏によれば, FLEUTIAUX が日本より記録したヒメコメツキダマシ *H. japonicus* FLEUTIAUX, 1902 の中には数種が混入しているとのことである。

9. メスグロミゾコメツキダマシ *Torigaia bicolor* HISAMATSU et SATÔ, 1957

1♀, 湯ノ花, 26. vii. 1975, 露木繁雄採集。

10. ニホンヒメミゾコメツキダマシ *Dromaeolus nipponensis* FLEUTIAUX, 1923

1頭, 会津若松市背灸山, 11. viii. 1947, 黒沢採集。

11. フトチャイロコメツキダマシ *Fornax lewisi* FLEUTIAUX, 1923

2頭, 河沼郡湯川村, 12. vii. 1949, 黒沢採集。

12. フチトリコメツキダマシ *Dirhagus pectinicornis* HISAMATSU, 1960

1♀, いわき市江田, 17. vii. 1983, 大桃採集。

13. ムナクボミゾコメツキダマシ *D. foveolatus* FLEUTIAUX, 1923

1♀, 南会津館岩村, 22. vi. 1985, 大桃採集。

14. コガタフチドリコメツキダマシ *D. mystagogus* FLEUTIAUX, 1923

1♂, 南会津館岩村鱒沢林道, 20. vi. 1982, 大

桃採集。

15. トゲナガミゾコメツキダマシ *Rhacopus modestus* (FLEUTIAUX, 1923)

1頭, 原町市赤根林道, 23. vi. 1980; 1頭, いわき市江田, 24. vii. 1982, すべて大桃採集。

16. キイロナカミゾコメツキダマシ *R. miyatakei* (HISAMATSU, 1955)

1頭, 江田, 6. viii. 1982, 大桃採集。

17. *Melanoscythos* sp.

2頭, いわき市四時川溪谷, 29. iv. 1982, 大桃採集。

フィンランドの Dr. J. MUONA によれば, 上記の属の未記載種であると言う。詳細は公表されてからに譲りたい。

合計 17 種を記録したがまだ手許に未同定のが数種あるので追って報告していきたい。なお私の調べた所によると, 1 を除き福島県未記録と思われる。(横浜市金沢区, 秋山黄洋)

○利尻島, 北海道のチビシテムシ 3 種 (チビシテムシ科分布資料 4)

利尻島と北海道本島から未記録と思われるチビシテムシが手許にあるので報告する。

Catops sparsepunctatus JEANNEL ミヤマチビシテムシ

1♀, 利尻島長官山附近, 7. viii. 1984, 松本俊信採集。

本種は本州と四国から知られていたが, 久松・林 (1985) は北海道を追加した。利尻島からは初めて記録されると思われる。貴重な標本を恵与された松本俊信氏にお礼申し上げたい。

Catops angustipes apicalis PORTEVIN アカアシチビシテムシ

1♀, 函館市七重浜, 4. ix. 1983, 沢田和宏採集。

本種は本州と四国 (久松・林, 1985) から知られていたが, 九州でも以前から採れているらしい (例えば高倉, 1981, '83)。しかし, 北海道からは未記録と思われる。採集者の沢田和宏氏にお礼申し上げたい。

Catopodes fuscifrons (KRAATZ) タシヒゲチビシテムシ

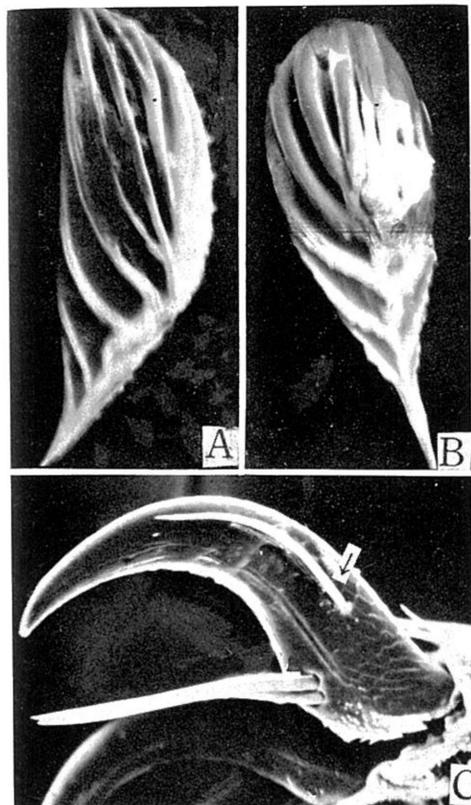
1♀, 渡島支庁大千軒岳二股, 24. viii. 1986, 筆者採集。

本種は従来, 国内では本州, 四国, 九州, 屋久島から記録されていたが, 久松, 林 (1985) は奄美大島も含めた。北海道からは初めての記録となる。

(神奈川県座間市, 西川正明)

○ヒメサビキコリの系統について

ヒメサビキコリの仲間は地上性で, 一般に河原の砂礫中などに生息する。扁平な体と短く突出した体毛など他のサビキコリの仲間とはやや異った体形をしているので, 古くはサビキコリとは別の独立した属 (*Colaulon* または *Cryptolacon*) として扱われていたが, 現在ではサビキコリ属 (*Agrypnus*) の 1 亜属 (*Colaulon*) として位置づけられている。



しかし、ヒメサビキコリの仲間が、サビキコリの仲間とはやや異った方向に分化しつつあることは事実で、その実体は生態面により強く現われている。生息場所が比較的限られていることとは別に、ハマベヒメサビキコリ (*A. miyamotoi*) のように海浜性で、後翅が退化したものが存在することは大変興味がある。

サビキコリの仲間とヒメサビキコリの仲間との形態上の大きな差の一つに、翅鞘の体毛が舌状で規則正しく生ずることがあげられる。体毛は図A、Bに示したように、ヒメサビキコリの仲間は短大で先端が強くくびれているが、基本的な形態はサビキコリのそれと相同である。また、肢の爪に生ずる剛毛は、基部内側に生ずるものと、さらに外側の基部近くに生ずる1本の剛毛(↑印)とがあり、これも両者は相同である。

これらのことから判断して、ヒメサビキコリの仲間はサビキコリの仲間とはきわめて近い関係にあり、両者を同属内の種として処理する現在の分類体系はきわめて妥当なものと思われる。

図Aはヒメサビキコリ (*A. scrofa*) の翅鞘の体毛、図Bはハマベオオヒメサビキコリ (*A. miyamotoi tsukamotoi*) の翅鞘の体毛、図Cはシロモンサビキコリ (*A. scutellaris scutellaris*) の肢の爪の剛毛を示す。(岡崎国立共同研究機構、大平仁夫)

後藤光男君を偲ぶ

大倉正文

思えば40有余年にわたる長い付き合いであった。慢性肝炎からの食道静脈瘤で、親友を失なうことになるうとは、10数年前に胃潰瘍の手術を受けた際の輸血により血清肝炎にかかり、時々病院へ通っていたことは知っていたが、まさかそれが元であたら62才の人生を終ろうとは夢にも思っていなかった。

平生は至って元気で、時々一緒に近くの山々へ採集に赴いた際にも常に先頭を歩き、ビーティングを行ったり、オサ掘りを共にした場合も、いつも私よりも倍以上の成果をあげていたものである。

非常に几帳面な性質で、採集して来た甲虫類、特に糞虫の小さなものまで一つ一つ触角や肢をきちんと整えてきれいな標本を作り、お得意の活字押し器でデータラベルを印刷し、標本箱に収めてあるのは見事なものであった。

また、一時ヒメドロムシの蒐集に熱をあげお供したこともあるが、2人でドジョウ掬いよろしく金網を持って川へ入り、上流の小石や砂を掻き回して、金網で受けるという方法で採集したものである。これ等の糞虫やヒメドロムシは野村 鎮氏に送られ *Aphodius gotoi* や *Ordobrevia gotoi*, *Zaitzeviaria gotoi* 等の種名が付けられて、我が国の昆虫界に寄与している。

それは初冬の或る一日であった。ドウキョウオサムシの採集を目的に後藤君ほか1名の3人で金剛山へ出掛けた。ローブウェイで山頂駅へ着くと、山上の樹々は一面に見事な霧氷を呈していた。恐らく気温は零度以下で、寒さがひどくじっと立っていることができず、そのうえ北西の風が強く手がかじかんで、オサ掘りどころではなかった。尾根の東側の少しは西風の当らぬ場所で昼食をとったが、暫らくすると寒さのためガタガタと震えがくる。後藤君と友人の2人は内部から暖めるわと持参のウィスキーをチビチビやり出したが、アルコールの全然だめな私はただ震えながら見詰めるのみであった。

前述のように慢性肝炎になってからは、定期的に医者の診察を受けていたようであるが、アルコールの量だけは医者の指示に従わず、定量しか与えられぬと自身で買いに行き、毎晩チビチビやっていたようである。これが寿命を縮めた原因ではあるが、またご遺族の方々には申し訳ないが、同君は好きな甲虫を集め、好きなアルコール類を堪能して、幸福な人生を送ったように思われる。ただ、もう少しは長生きしてほしかった。そうして一緒に採集にも行きたかったが、これも今となっては詮無いことである。

幽明その境を異にするようになってしまったが、心から同君の霊安かれとご冥福を祈る次第である。(神戸市東灘区)

○北海道焼尻島の甲虫類

横浜国立大学教授 青木淳一博士は昨年 (1985) 10 月に北海道留萌支庁苫前郡焼尻島と天売島の土壤動物の調査に赴かれた際に、10 月 3 日に焼尻島のイチイとミズナラの原生林中の朽木や倒木の下などから若干の甲虫を採集された。焼尻島は天売島と並んで北海道の西岸にある小島であるが、天売島とは異って原生林も残されており、興味のある種類もあるので報告する。

1. アオカタビロオサムシ *Calosoma inquisitor cyanescens* MOTSCHULSKY

1 頭。翅鞘のみ。

2. モモプトンデムシ *Necrodes nigricornis* HAROLD

1 ♂。やや小型の個体である。

3. ヒラタンデムシ *Silpha perforata* GEBLER
4 ♂♂ 3 ♀♀。北海道本島のものに比べ、明らかに小型 (体長 15~16 mm) で唐金色がやや強い。この様な特徴は北海道本島のものよりはむしろ樺太のものに一致する。あるいは北海道本島のものとは別亜種として区別した方がよいのかも知れないが、同じく北海道西北岸にあり、さらに樺太に近い利尻島産の標本を検していないので、これ以上の言及は避けたい。

4. クロヒラタンデムシ *Phosphuga atrata* (LINNÉ)

1 ♂ 1 ♀。北海道本島産に比べ、やや光沢が強いこと以外に格別な相異は見当たらない。

5. ミヤマクワガタ *Lucanus maculifemoratus* MOTSCHULSKY

1 ♀。頭胸部と翅鞘のみ。恐らく北海道本島と同じエゾミヤマクワガタ f. *hopei* PARRY に属するものであろうと推定されるが、♂を検していないので決定できない。

6. スジクワガタ *Macrodercas striatipennis* MOTSCHULSKY, 1 ♀。

7. センチコガネ *Geotrupes laevistriatus* MOTSCHULSKY

1 ♂ 2 ♀♀。体色は北海道本島のものに似て唐金色の光沢が強く、利尻島や礼文島のものに強い紫色を帯びることはない。

8. キマワリ *Plesiophthalmus nigrocyaneus* MOTSCHULSKY

3 ♀♀。小型で黒色、上翅の縦条溝は強く深い。

9. セスジホソクビキマワリ *Stenophanes strigipennis* (MARSEUL)

1 ♀。北海道本島のものと大差がない。

10. ナガクチカクンゾウムシの 1 種 *Rhadino-merus* sp. 1 頭。種名は確定し得なかった。

最後になったが、標本を恵与された青木教授に感謝する。(東京都世田谷区、黒沢良彦)

○北海道渡島大島における数種の甲虫について

渡島大島 (オンマオオシマ) は、北海道松前町江良 (エラ) の西約 50 km (N 41° 30', E 139° 20') の

日本海上にある周囲 16 km の無人島である。

筆者はこの島で数種の甲虫を採集しているので古い記録ではあるが報告する。

なお種の同定については石田正明氏のお手をわずらわしたので深く感謝する。

エゾカタビロオサムシ *Campalita chinense* KIRBY
2 頭, 10. vii. 1982.

セアカオサムシ *Hemicarabus tuberculosus* DEJEAN et BOISDUVAL 1 頭, 18. vi. 1982; 1 頭, 7. vii. 1982, 16 頭, 10. vii. 1982.

サビキコリ *Agrypnus binodulus* MOTSCHULSKY
1 頭, 18. vi. 1982; 7 頭, 10. vii. 1982.

エゾヒサゴメツキ *Hypolithus aeneoniger* MIWA
1 頭, 14. vii. 1982.

クシコメツキ *Melanotus legatus* CANDÈZE
4 頭, 13. vii. 1982.

ムネマルヒョウタンゾウムシ *Sympiezomias amplifollis* NAKANE 1 頭, 10. vii. 1986.

なおスジコガネ類については石田氏により本誌 No. 59 (Nov. 1982) に記録されているので参考とされたい。(北海道稚内市、長尾 康)

○福島県のカッコウムシ (1)

従来、福島県のカッコウムシ科の報告はほとんど見られなかった。先般、筑波大学の太田洋博士よりご恵与いただいた多数の甲虫の中にいくつか含まれていたので第一報として報告しておく。発表を許された太田博士に深謝する。

1. ホソカッコウムシ *Cladiscus obeliscus* LEWIS
1 頭, いわき市四時川, 17. vii. 1981; 1 頭, いわき市江田, 6. vii. 1982; 1 頭, 同上, 24. vii. 1982. クリ, コナラのピーティングにより得られた。

2. イガラシカッコウムシ *Tillus igarashii* KÔNO
5 頭, いわき市江田, 材採集, 27. iv. 1980, 羽化脱出, 10~20. v. 1980.

クリより 4 頭, オニグルミより 1 頭, 羽化脱出。後者のホストは新知見と思われる。

3. クロダングラカッコウムシ *Stigmatium nakanei* IGA 1 頭, いわき市江田, 10. vii. 1982.

4. ムナグロナガカッコウムシ *Opilo niponicus* LEWIS 2 頭, 原町市赤根林道, 22~23. vi. 1980; 2 頭, いわき市江田, 材採集, 27. iv. 1980, 羽化脱出, 16~20. v. 1980; 3 頭, 同上, 5. vii. 1980; 1 頭, 同上, 4. vii. 1981; 1 頭, 同上, 24. vii. 1982; 1 頭, 同上, 6. viii. 1982.

赤根林道のもののはクリより羽化脱出した。

5. キムネツツカッコウムシ *Tenerus maculicollis* LEWIS 7 頭, 原町市赤根林道, 6~23. vi. 1980; 2 頭, いわき市江田, 10. vii. 1982.

赤根林道で採集された一頭は前胸背板に斑のない ab. *higonius* LEWIS である。

6. ルリツツカッコウムシ *Tenerus lewisi* LOHDE
1 頭, いわき市江田, 19. v. 1981.

以上すべて太田博士採集。

(横浜市金沢区、秋山黄洋)

○サキシマケシマグソコガネ沖縄諸島の記録

サキシマケシマグソコガネ *Psammodyus kondoi* MASUMOTO は、石垣島および西表島産の標本を基に1984年に記載されたマグソコガネであるが、その後の記録を見ないようなので、筆者が沖縄諸島の久米島などで採集した記録を報告しておきたい。

多数、久米島謝名堂, 27. ii. 1986; 多数、瀬長島, 22. ii. 1986. 原記載で報告された石垣島吉原および西表島大原産の paratype 標本は筆者採集によるものであるが、吉原、大原とも海岸での採集は波打ち際に近い砂地で行ったため多くの個体を得ることが出来なかった。しかし、今回報告した2ヶ所は共に海浜上部の植物根際の土が混った砂中より採集したもので極めて多くの個体が見られた。恐らく今回得られた個々が本種の本来の生息場所なのであろう。

なお、瀬長島は沖縄本島那覇空港の目と鼻の先にある小さな島であり、沖縄本島の西側の海岸には本

種が生息している可能性が高い。

(東京都世田谷区, 沢田和宏)

○シロスジコガネ最北の記録

シロスジコガネ *Polyphylla albolineata* (MOTSCHULSKY) は、北海道、本州、伊豆諸島、四国、九州に分布し、海岸のマツ林などに生息する種である。北海道からは渡島半島からのみ知られていたが、青山 (1985, *Jessoensis*, vol. 12) により日高支庁の沙流郡門別町から記録された。筆者は今回、北海道北部の苫前町産の本種の個体を見ることができたので最北の記録として報告しておく。

1♂, 留萌支庁苫前郡苫前町上平, 1. viii. 1985, 生平利明採集。

本個体は、古丹別川河口付近の日本海に面した砂浜海岸において採集したものである。

末筆ながら、貴重な標本をご恵与下さった生平利明氏に深謝する。(北海道旭川市, 松本英明)

新 刊 紹 介

森本 桂・林 長閑編著 原色日本甲虫図鑑 (I)

保育社 (1986年5月), 323頁, 113図版, 定価 4,000円

保育社の原色日本甲虫図鑑の第1巻が全4巻のしんがりとして本年5月に出版された。森本 桂・林長閑両氏の編著で、これに佐藤正孝、上野俊一、黒澤良彦、佐々治寛之の4氏が共著者として一部を担当しているが、いずれも日本における甲虫類研究のトップクラスの方がたであることは会員諸氏にはあらためて説明するまでもないだろう。

この第1巻は4巻からなるこの甲虫図鑑の総論編ということになっているが、従来の図鑑とは全く趣を異にし、甲虫類の形態、生態、未成熟期、系統・分類、分布、人類との関係など多方面の問題をとりあげて、興味深く解説されている。このほか、日本産甲虫目分類表や甲虫の系統と分類に関する主要文献目録が掲載されていて、第II~IV巻を効率的に使うための良い手引書になっているのは勿論であるが、さらに進んで甲虫学の概要を把握するのに好適と思われる。

紹介者はこの書を手にしたとき、すぐに戦前の名著「日本甲虫分類学」を思い出した。この書は当時、大変好評を博したものであるが、何といっても半世紀も前に出版されたものであるから、今日から見れば当然のことながら物足りぬ感があるのは否めない。はるかに充実した内容をもつこの原色日本甲虫図鑑 (I) の刊行は甲虫類の研究者に大いに歓迎されると思うが、以下内容についての感想を二、三述べてみたい。

系統と分類の項は森本博士の担当 (科の検索表のみ佐々治博士の担当) であるが、内外の文献を渉猟して得られた知見を、論議を加えながら、かなり詳しく紹介されているので、教えられることが多い。ただ欲をいえば、類縁関係を示す図など (成虫の形態の項の解説図も同様であるが) を一個所に集めた

いで、それぞれの該当記事の近くに置いたほうがよかったのではないかと思うが、編集のつごうでやむを得なかったのではなかろうか。生態の項では両編著者による記述のほかに、佐藤、上野、黒澤の3氏がそれぞれお得意の分野である水生の甲虫、特殊環境 (深い土中、洞窟、高山など) の甲虫、および甲虫類に見られる擬態について興味深い解説をされており、特に黒澤博士によるジョウカイ類とハナカミキリ類との間に見られる擬態現象の記述はなるほどと感心させられる。

幼虫に関する事項はすべて林博士の担当であるが、112プレートに及ぶ幼虫の図は圧巻である。幼虫の科までの検索表はほとんどすべての科をカバーしており、またII~IV巻で採用されている分類体系とほとんど矛盾せず、しかもとりあげられている特徴に例外が少ない。幼虫による科までの検索表はこれまでも外国ではいくつか発表されているが、林博士の示された検索表はそのどれよりも使いやすく、優れているように思う。幼虫の図は大多数が博士みずから描かれたもので、これまでに幼虫形態の知られていなかった種も相当数含まれているが、そのほかに20科にわたる内外産の幼虫が示されている。掲載された幼虫は総計171種でそれほど多くはないが、日本から記録のある科のほとんどすべてのものについて少なくとも科ごとに1種は図示されているので、豊富な部分図とあまって検索表を利用するのに大いに役立つことと思われる。今後は幼虫に特に詳しい研究者でなくても、たいいての幼虫を科のランクまで何とか判別することができるようになるだろう。

いずれにせよ、他に類を見ない「甲虫学解説」ともいべきこの書は一般の昆虫学研究者にとっても非常に有用であると思われるが、特に甲虫の研究を志す人には座右に備えて大変便利であると信ずるので、他の3巻と共にこの第1巻を揃えておくことをおすすめしたい。(東京都豊島区, 黒佐和義)

○コアリガタハネカクシの北海道の記録

コアリガタハネカクシ *Megalopaederus lewisi* (CAMERON, 1930) は本州(中部以北)の山地帯に限り分布する種である。今回、九州大学農学部昆虫学教室所蔵のハネカクシの中に北海道から採集された個体を見出すことができたので、古い記録ではあるが下記のとおり報告する。

1♂, 29. viii. 1951, 北海道札幌, 松田(I. MATSUDA) 採集。

本個体の雄交尾器は本州のものと同まったく変わらなかった。(九州大学農学部, 直海俊一郎)

○ムナビロナガゴミムシの福井県における記録の訂正

「福井県昆虫目録」(福井県, 1985)にはムナビロナガゴミムシが初記録として採録されているが、学名が *Pterostichus straneo* HABU となっているので *P. abaciformis* STRANEO と訂正する。産地は筆者の標本によるもので、笠原須磨生氏に同定していただいたが学名の誤記は筆者のチェックミスで起こったことであり、笠原氏には大変ご迷惑をお掛けした。この場を借りてお詫びしたい。

本種は目録で記した通り、青葉山が未公表の産地を含めもっとも西の分布地となる。筆者が採集した環境は標高450m以上の温帯樹林帯(ブナ帯)下部にあたり、鶏肉の腐肉トラップで得たものである。冠山では標高1,000m以上のブナ帯中部で、明るいつ尾根の同様なトラップに入った。

なお、目録の刊行後、福井県のゴミムシ類は20種以上の追加が確認されているが、機会を改めて報告したい。末筆になったが、誤りをご指摘下さり、多くのご教示をいただいた笠原氏に心より深く感謝したい。(福井県坂井郡, 斎藤昌弘)

= <連絡・報告> =

○原色日本甲虫図鑑Ⅱ-Ⅳの追補・正誤表について

保育社から下記の文章の掲載依頼を受けました。会員の方がたの便宜を配慮して掲載します。「この度、読者のみなさまからの要望もあり、『原色日本甲虫図鑑Ⅱ～Ⅳ』の追補・正誤表を森本 桂先生の編集で作成いたしました。ご希望の方は、送料(1部120円, 切手可)を同封のうえ、小社宛にご請求ください。〒540 大阪市東区上町1-17-13 (株)保育社『原色日本甲虫図鑑』係」

昆虫の器具は「志賀昆虫」へ

日本ではじめてできた有頭昆虫針!!

1, 2, 3, 4, 5号(各号100本180円)

なお、有頭針00, 0号もできました。その他、採集、標本整理用各種器具も取揃えてあります。

〒150 東京都渋谷区渋谷1丁目7-6

電話 (03) 409-6401 (ムシは一ばん)

振替 東京 21129

志賀昆虫普及社

○採集会報告 昨年の山梨県大菩薩における採集会にひきつづき、第3回採集会を群馬県霧積温泉の金湯館を根拠地として6月7～8日におこないました。初日は時折雨まじりの天候でしたが、翌日は回復し、参加者は19名。広葉樹林の良好な環境のもとで、各自数々の収穫を得て、夜は懇談を楽しみました。遠路をいとわず採集された会員諸氏、お世話になった金湯館の各位、ならびに差し入れなどのご高配を頂いた東京農業大学の後閑陽夫教授に感謝いたします。なお、来年も採集会の開催を予定しております。希望地、推薦地がありましたらお知らせ願います。(世話人)



参加者氏名(ABC順, 敬称略)

阿部光典, 林 長閑, 古田 治, 岩崎 博, 井沢高行, 笠原須磨生, 黒沢良彦, 松本浩一, 南 雅之, 岡島賢太郎, 岡島礼次郎, 岡島秀治, 岡島由利子, 笹井厚子, 妹尾俊男, 田尾 美野留, 上野俊一, 渡辺泰明, 吉谷昭恵。

甲虫談話会

会費(一ケ年)3000円, 次号は12月下旬発行予定
投稿〆切は11月20日

発行人 上野俊一

発行所 甲虫談話会 東京都台東区上野公園

国立科学博物館動物研究部内

電話 (364) 2311, 振替東京 0-60664

印刷所 創文印刷工業株式会社

タツミの昆虫採集器具

ドイツ型標本箱 木製大 ¥5,000, 桐合板製インロー型標本箱中 ¥1,700, 送料一箱につき都内及第一地帯: 3個以下¥1,300, 4個以上¥850(以下同様), 第2地帯¥1,500, ¥950, 第3地帯¥1,700, ¥1,050, 其他, 各種器具, 針などを製本販売しています。カタログを御請求下さい。(¥60)

タツミ製作所

〒113 東京都文京区湯島 2-212-25
電話 (03)811-4547, 振替 6-113479